



中小企業・管理職のためのリスクマネジメント研究会

リス研発足10周年記念講演会 静岡鉄道株の今田智久社長が Maasと次世代の まちづくりについて講演

経営者や個人事業主を中心とした約20人のメンバーで構成する中小企業・管理職のためのリスクマネジメント研究会(中溝一仁代表)。毎月第2水曜日にビジネスに関するリスクについて、メンバーそれぞれが専門性を生かして勉強会を行っている。今回は、一般の人たちや行政関係者など約120人が参加した10周年記念講演会の模様を紹介する。



今田社長(左)と中溝代表によるトークセッション

中小企業・管理職のためのリスクマネジメント研究会(リス研)は9月12日、リス研発足10周年記念講演会を開催した。講師は静岡鉄道株の今田智久社長。テーマは『次世代交通体系Maas※とまちづくりへの挑戦』。

静鉄グループでは、鉄道、バスなど公共交通事業を中心に自動車販売及びレンタル・リース、流通小売、不動産、ホテル運営など、地域に根差した幅広い事業に取り組んでいる。講演の冒頭で今田社長は、「鉄道事業で培ってきた安全・安心というブランドを生かし、静岡という地域で暮らす幅広い世代の方たちに対して、安全で質の高い商品・サービスを提供し続けることで、安心や快適をもたらすことがグループの使命です」とあいさつ。一方で、市場ルールの変化や消費動向の変化、ビジネス形態の変化などにより、「時間とお金の使い方が変わろうとしている中、企業もそれに準じて変化していく

必要がある」と解説した。講演ではアメリカの経済学者マイケル・E・ポーター氏がこれからの社会は競争から共創に変化していくと提唱していること。企業が生き残っていくためにはCSR(企業の社会的責任)に加えて、CSV(共通価値の創造)に取り組むことが必須であると講演した。

100年に1度の移動革命

少子高齢化による人口減少にともない公共交通のあり方や役割を見直す検証が進められている。そのキーワードとなるのが次世代交通体系Maasだ。免許を返納した高齢者やマイカーを持たない人たちにとって、鉄道やバス、タクシーなどの公共交通機関は生活の足(移動手段)として欠かせない存在だ。Maasでは、例えば、「病院に通う」「買い物に行く」などの目的や場所、到着時間などを同じにした人たちの情報をスマートフォンなどで共有し、相乗りタクシーや路線バス、鉄道を組み合わせた移動など、自家用車の自由度と変わらないサービスの提供を目指している。利用者にとってはスマホで予約したり、キャッシュレスで運賃を支払ったりできるなど利便性は高いと見込んでいる。

静岡においては、今年5月にICTやAIなど最新技術を取り入れ、誰もが利用しやすい新たな移動サービスの提供と、持続可能なまちづくりを実現するための静岡型Maas基幹事業実証事業プロジェクトを官民連携で開始した。



中溝一仁代表

静岡型Maasは、移動ストレスを最小化し、外出につながる仕掛けを施すことで、商業および経済の活性化を可能とする地域モデルの構築を目指したモデルとなっており、今年11月に①AI相乗りタクシーの実証運行②鉄道・路線バス・タクシーなど異なる交通モードの連携③生活関連施設(商業施設・病院など)との連携④公共交通マーケティングの可能性調査⑤視察対応における経済波及効果調査―以上、5つのテーマを設定した1000人規模のモニター調査を行う計画だ。講演の結びに、「人の行動データを正しく分析し、それに応じたマーケティング活動を可能にする次世代移動ビジネスに、多くの企業が着目しています。Maasの目的はまちづくり」と今田社長が話したように、企業にとっても、利用者にとっても、引き続き注目を集めるテーマと言える。

リスクマネジメント研究会に関する問い合わせは電話054-257-8695(有アクセスユープラン内)
<http://www.risunane.com>

※Maas=Mobility as a Serviceの略語。複数の移動サービスをシームレスにつなぎ人の移動や経済活動をサポートするための仕組み。